

節分 恵方巻と湯札

2月3日の節分を境に季節は冬から春へと移ります。節分の日には邪気を払うとして昔から豆まきの習慣がありますが、いつの頃からか「恵方巻」を食べるといって、新しい風習が広まりつつあります。

恵方巻は巨大な海苔巻きのようなもので、それを縁起の良い方角に向かって丸ごとかぶりつくのです。調べてみるとこの風習は、江戸時代の終わりから明治にかけて大阪で始まったようです。

ところで、この恵方巻を切り分けもせずに、かぶりつくというのは、あまり上品な振る舞いとは言えず、日本人の食事作法としては極めて異例です。何故このような無作法な風習が広まったのか解りませんが、節分の恵方巻はバレンタインデーのチョコのように、何やら商魂のたくましさが出て見えるのです。

その一方で節分を機に罪や穢れを祓い、清らかな気持ちで新しい春を迎えようとする、

敬虔な行事も行われています。西川津の総鎮守熊野神社では「湯札」というムセンチほどの小さなお札を、氏子の皆さんに家族の人数分配ります。人々は節分の夜、入浴の後にこのお札で体を撫で、最後に息を吹きかけ己の罪や穢れを湯札に移します。そして家族全員のお札を氏神様に納めるのです。

神の力を借りて穢れ多き身を清め、謙虚に生きていこうとする人々の素朴な風習が、今も川津の郷に脈々と受け継がれているのです。節分を前にして恵方巻のテレビCMが流れるたびに、湯札の風習を思い起こし、川津の郷の奥深さと、そこに住む人々の純朴で心健やかな暮らしぶりに心打たれるのです。